第 1 章　サウジアラビアの現体制の安定性に関する考察

近藤　重人

はじめに

2015 年 1 月にサルマーン・ビン・アブドゥルアジーズ（Salman bin Abdulaziz）が国王に即位して以来、サウジアラビアの内政は急激な変化の中にある。変化の中心は彼の若い息子のムハンマド・ビン・サルマーン（Mohammed bin Salman）の急速な台頭であり、2015 年 4 月に副皇太子、2017 年 6 月には皇太子に就任し、権力の階段を駆け上がった。彼の急速な昇進が、サウード家内の政治にどのような波紋を広げたのだろうか。また、ムハンマド･ビン･サルマーンは国防相、経済開発問題会議議長、政治安全保障問題会議議長として、積極的な外交政策や経済・社会改革などを主導しているが、それをサウジアラビアの国民や宗教界がどう捉えているのだろうか。

本章の第 1 節では、このムハンマド・ビン・サルマーンの台頭が最近のサウジアラビアの王族政治において異例であることを理解するために、サルマーン国王治世以前の同国の体制を概観する。その上で、第 2 節ではムハンマド・ビン・サルマーンが実力組織を手中に収めていった過程や、その昇進や権力掌握に対する他の王族の反応と、王族政治の変化を検討する。第 3 節では彼が推進している政策に対する他の王族、国民、宗教界の反応を分析する。最後に、現在のサルマーン国王とムハンマド・ビン・サルマーン皇太子が主導する体制の安定性に影響を及ぼす要素を検討し、サウジアラビアの内政の今後の展望について考察する。

1. これまでのサウジアラビアの体制

(1) ファイサルが築いた体制

サウジアラビアはサウード家が支配する絶対君主制国家である。この国家の礎を築いたのはアブドゥルアジーズ・ビン・アブドゥッラフマーン（Abdulaziz bin Abdulrahman）初代国王であるが、2010 年代前半まで続く同国の基本的な統治体制を形作ったのはファイサル･ビン・アブドゥルアジーズ（Faisal bin Abdulaziz）第三代国王である。その体制とは、1960 年代のサウード・ビン・アブドゥルアジーズ（Saud bin Abdulaziz）第二代国王とファイサル皇太子の権力闘争の際、ファイサル側に立った異母弟のファハド・ビン・アブドゥルアジーズ（Fahd bin Abdulaziz）、アブダッラー・ビン・アブドゥルアジーズ（Abdullah bin Abdulaziz）、スルターン・ビン・アブドゥルアジーズ（Sultan bin Abdulaziz）、ナーイフ・ビン・アブドゥルアジーズ（Nayef bin Abdulaziz）などの有力な王子が主導する体制と言い換えられる。このうちアブダッラー以外はファハドを筆頭とする有力な同腹の兄弟グループ

であるファハド一族（スデイリー・セブン）に属しており、両者はライバル関係にありながらも協力して国家運営を進めてきた。

たとえば、2005 年に国王に即位したアブダッラーは、2009 年にはナーイフを、2011 年にはサルマーンを次期皇太子含みの第二副首相に任命し、ファハド一族への配慮を示した。サルマーンは 1963 年からリヤード州の知事を、2011 年からは国防相を務めていただけではなく、長らく私的な王族会議の場で王族間の調停役をはたしたことから人望があり、妥当な人選と考えられた。

(2) アブダッラーの淡い期待

しかし、2012 年にスルターン皇太子が死去し、サルマーンが皇太子兼副首相の座に昇格し、再び第二副首相のポストが空席になると、アブダッラーが気遣うべき有力なファハド一族の王子はいなくなった。そこで彼が選んだのが、自らの顧問を務め、存命の第二世代（アブドゥルアジーズの子の世代）で最年少のムグリン･ビン･アブドゥルアジーズ（Muqrin bin Abdulaziz）であった。

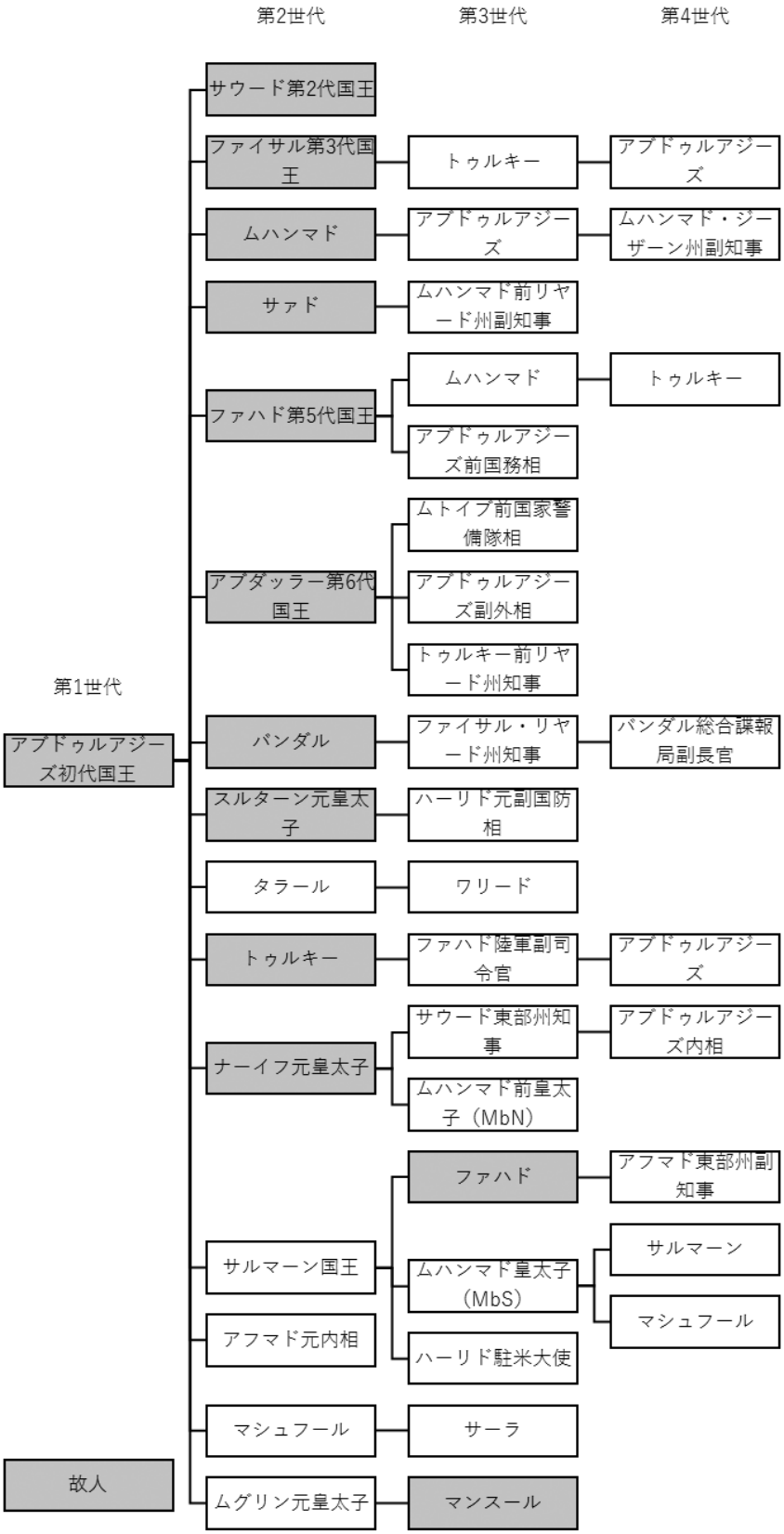
アブダッラーとしては、第二世代で最年少のムグリンを第二副首相、そして 2014 年には彼が新設したポストである副皇太子に任命することで、第二世代間の兄から弟への王位継承に終止符を打ち、そして次の副皇太子には第三世代（アブドゥルアジーズの孫の世代）で自らの子であるムトイブ・ビン・アブダッラー（Mutib bin Abdullah）を就任させたいと考えたのかもしれない。そのためにはサルマーンかムグリンがアブダッラーよりも先に死去または失脚するか、自らの死後にサルマーンがムトイブを副皇太子に任命する必要があった。しかし、アブダッラーはサルマーンよりも先の 2015 年 1 月に死去し、さらに王位に就いたサルマーンはムグリンの後任の副皇太子にはムトイブではなく、故ナーイフ皇太子の子で、実務能力が評価されていたムハンマド・ビン・ナーイフ（Mohammed bin Nayef）内相を任命した。ムハンマド・ビン・ナーイフはムトイブより年少のため、この時点で事実上ムトイブは王位継承レースから脱落した。こうして、ムトイブを王位継承者にするというアブダッラーの期待は泡と消えた。

2. ムハンマド・ビン・サルマーンの台頭と他の王族

(1) 副皇太子就任と書簡問題

サルマーンはさらに、2015 年 4 月の人事でムグリンを皇太子から解任し、ムハンマド・ビン・ナーイフを皇太子に昇格させ、副皇太子にはムハンマド・ビン・サルマーンを任命した。ムハンマド・ビン・サルマーンはサルマーンの最愛の息子であり、彼の母ファフダ・ビント・ファラーフ（Fahda bint Falah）も息子の昇位を強く望んだとされる。しかし、ムハンマド・ビン・サルマーンは当時 29 歳と若く、年長者が優遇されてきたサウジアラビア

図１　サウード家系図



（出所）各種報道をもとに筆者作成。

においては異例の人事であった。さらに、彼は2015年1月に国防相に就任したが、それ以前は内閣専門家委員会顧問、そして父の下でリヤード州知事特別顧問、皇太子府長官などを務めたに過ぎず、その行政手腕も未知数であった。ムハンマド・ビン・サルマーンの副皇太子への任命について、アブドゥルアジーズ初代国王の子孫が委員を務める忠誠の誓い委員会は、34人中28人が賛成、4人が反対、2人が棄権したが[1]、異例の人事に対して水面下ではもっと多くの王子が反発していた可能性もある。

2015年9月には、英ガーディアン紙がサウジアラビアの現体制を批判する書簡がサウード家内で広まったと報道した[2]。「サウード家のすべての者に対する緊急警告」と題されたこの書簡の著者は、サウード家の第三世代の王子であると自称し、サルマーンの統治能力やムハンマド・ビン・サルマーンのイエメン政策などを批判した。そして、タラール・ビン・アブドゥルアジーズ（Talal bin Abdulaziz）、トゥルキー・ビン・アブドゥルアジーズ（Turki bin Abdulaziz）、アフマド・ビン・アブドゥルアジーズ（Ahmed bin Abdulaziz）前内相という3人の存命の第二世代の王子が緊急会合を開催し、話し合いによって国王、皇太子、副皇太子を交代させるべきであると呼びかけた。しかし、タラールやトゥルキーはサウード家内の影響力がなく、この書簡が他の王族を動かすことはなかった。

（2）皇太子就任

その後しばらくサルマーン国王、ムハンマド・ビン・ナーイフ皇太子、ムハンマド・ビン・サルマーン副皇太子の3人が主導する体制が続いたが、2017年6月にサルマーンは突然ムハンマド・ビン・ナーイフを皇太子から解任し、ムハンマド・ビン・サルマーンを皇太子に昇格させた。つまりサルマーンはムハンマド・ビン・ナーイフを、ムハンマド・ビン・サルマーンを皇太子に任命するまでの中継ぎとしてしか考えていなかったのである。ムハンマド・ビン・サルマーンは副皇太子を務めた2年間で国防省での指導力を確保し、経済・社会改革の面では国民の若年層を中心に支持を獲得してきた。さらに、2017年5月のドナルド・トランプ（Donald Trump）大統領のサウジアラビア訪問を経て米国の新政権と関係を構築した。こうしたことから、サルマーンはムハンマド・ビン・サルマーンを皇太子に昇格させる環境が整ったと判断したのだろう。

ムハンマド・ビン・サルマーンの皇太子就任に際して、サウジアラビアのメディアはムハンマド・ビン・ナーイフが彼に忠誠を誓っている動画を放送した[3]。他方、ニューヨーク・タイムズ紙は、現役・元米政府関係者と王族に近いサウジ人からの情報として、ムハンマド・ビン・ナーイフがジェッダの自らの宮殿内で監禁され、国外渡航も禁止されていると報じた[4]。宮殿の守衛隊もムハンマド・ビン・サルマーンに忠誠を誓う守衛隊に切り替えられたという。ただし、ロイターが引用したサウジ政府筋は、この報道を「事実無根」として全面的に否定した[5]。11月7日にはムハンマド・ビン・ナーイフがマンスール・ビン・

ムグリン（Mansour bin Muqrin）の葬儀に参加している画像が公開されており[6]、少なくとも公的行事への参加は認められている可能性がある。

忠誠の誓い委員会は、ムハンマド・ビン・サルマーンの皇太子任命に対し、34 人中 31 人が賛成、3 人が反対の意思を示し[7]、彼が副皇太子に任命された時よりも賛成票が増えた。しかし、依然として 3 人は反対しており、ロイターはサウジ筋の情報として、前述のアフマド､そしてアブダッラー前国王の子のアブドゥルアジーズ･ビン･アブダッラー（Abdulaziz bin Abdullah）副外相とムハンマド・ビン・サアド（Mohammed bin Saad）前リヤード州副知事の 3 人が反対したと報じた[8]。ただし、サウード家内のアブダッラー家を代表する忠誠の誓い委員会のメンバーはアブドゥルアジーズではなくムトイブのはずであり、この報道の信憑性には疑問が残る。

サルマーンはムハンマド・ビン・サルマーンの皇太子就任を他の王族に納得させるため、いくつかの配慮を見せている。第一に、憲法に相当する統治基本法の第 5 条を改正し、ムハンマド・ビン・サルマーンが国王になっても、彼の兄弟や子を皇太子に任命できないようにした[9]。ただし、この条項はもちろん再改正される可能性がある。第二に、いくつかの鍵となるサウード家内の家系の若い王子に新たな役職を与えた。たとえば、ファイサル家でトゥルキー・ビン・ファイサル（Turki bin Faisal）元駐米大使の子のアブドゥルアジーズ・ビン・トゥルキー（Abdulaziz bin Turki）はスポーツ総合委員会副理事長に就任し、ムハンマド･ビン･サルマーンが注力するスポーツ振興にともに取り組むことになった。また、ファイサル・ビン・バンダル（Faisal bin Bandar）リヤード州知事などを輩出しているバンダル家からは、彼の子のバンダル・ビン・ファイサル（Bandar bin Faisal）が総合諜報局副長官に任命された。他にもファハド家、スルターン家、トゥルキー家、サッターム家などから若手を登用した。このように、サルマーンはムハンマド・ビン・サルマーンの皇太子就任がサウード家内で事を荒立てないよう腐心した跡が見て取れる。

(3) 実力組織の掌握

サウジアラビアでは強制力をもった実力組織として、国軍、国家警備隊、警察が並立しており、それぞれを管轄する国防相、国家警備隊相、内相に大きな権力が集まっていた。サルマーンはもともとこのいずれにも関与していなかったが、兄のスルターンが死去した 2011 年に国防相を引き継ぎ、国防省を徐々に権力基盤にしていった。2013 年にはスルターンの子で軍歴の長いハーリド・ビン・スルターンが副国防相から解任され、その後も副国防相は交代を繰り返し、2014 年以降は空席となった。そして、2015 年 1 月にサルマーンが王位に就いてからはムハンマド・ビン・サルマーンが国防相を務めている。

抜け目のないサルマーンは国軍以外の実力組織にも影響力を伸張し始めた。2017 年 4 月には王宮府の下に国家安全保障センターを設置し、治安問題に対する国王の関与を強化し

た。同年 6 月にムハンマド・ビン・ナーイフを内相から解任した後は、ムハンマド・ビン・サルマーンと近いアブドゥルアジーズ・ビン・サウード（Abdulaziz bin Saud）をその後任に任命した。アブドゥルアジーズは、ムハンマド・ビン・ナーイフの甥であるが、国防相室顧問を務めた経験からムハンマド・ビン・サルマーンと近く、むしろ彼の右腕と考えられる人物である。さらに、同年 7 月にサルマーンは、国王直轄の国家安全保障庁を設立し、それまで内務省が管轄していた特別治安部隊、特別緊急展開部隊、国家情報センターなどを管理下に置き、内相の職掌をさらに狭めた。こうしてサルマーンとムハンマド・ビン・サルマーンは内務省も影響下に置くことになった。

(4) 王族らの大量逮捕

ムハンマド・ビン・サルマーンが議長を務める腐敗防止最高委員会は 2017 年 11 月の設立と同時に王族などを大量に逮捕したが、その伏線は半年ほど前から見られていた。ムハンマド･ビン･サルマーンは同年 5 月のサウジ資本の衛星放送 MBC の番組内のインタビューで、「汚職に関わったものは、閣僚であれ、王族であれ、どんな地位にあったとしても、救われることはない」と語っていた[10]。そして､同年 6 月にサルマーンは内務省の監督下にあったとされる捜査検察委員会を国王と直接的につながる検察に改組し、サウード・ムジュイブ（Saud al-Mojeb）を検事総長に任命していた。このムジュイブこそが 11 月の逮捕劇で陣頭指揮をとった人物である。

逮捕された王族の中には影響力のある人物も含まれていた。その筆頭がムトイブであり、彼は逮捕と同時に国家警備隊相の任も解かれている。こうして、サルマーン親子が完全には掌握していなかった最後の実力組織である国家警備隊も掌握することになった。新たな国家警備隊相に就任したハーリド・ビン・アブドゥルアジーズ・ビン・アイヤーフ（Khalid bin Abdulaziz bin Ayyaf）は傍系王族であり、王族内での影響力は非常に小さい。ムトイブはこの逮捕および国家警備隊相からの解任に対して抵抗した形跡は見られず、逮捕から 3 週間後に約 10 億ドルの清算金を支払うことで釈放されたと報じられた[11]。他にもムトイブと同じくアブダッラーの子であるトゥルキー・ビン・アブダッラー（Turki bin Abdullah）前リヤード州知事が逮捕されており、アブダッラー家にとっては厳しい措置となった。他方、ファハド元国王の子のアブドゥルアジーズ･ビン･ファハド（Abdulaziz bin Fahd）元国務相、そしてファハド元国王の孫のトゥルキー・ビン・ムハンマド（Turki bin Muhammed）が逮捕されたことから、ファハド家にも打撃となった。

この逮捕劇は汚職の取り締まりの名目で実施されたが、ムハンマド・ビン・サルマーン自身も、場合によっては他の王族から批判されかねないような金銭の使用が一部の外国メディアで報道されている。たとえば、ニューヨーク･タイムズ紙は 2016 年に、ムハンマド･ビン・サルマーンが南フランスでの休暇中に約 5.5 億ドルのヨットを購入したと報じた[12]。

また、4.5 億ドルするレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画や 3 億ドルするフランスの大邸宅を購入したという報道も 2017 年 12 月に立て続けに現れた[13]。現時点でこれに対する他の王族の批判が顕在化している訳ではないが、今後批判の材料になる可能性は排除できないだろう。

(5) 今後の王族政治

2017 年 7 月にサルマーンが早くて 9 月に生前退位する可能性が一部外国メディアで報じられた後[14]、同様の憶測はいくつも出てきたが、どれも確証を得た報道ではなかった。ただ、サルマーンとしては、自身の存命中にムハンマド・ビン・サルマーンの国王即位を見届けたいという意図があるだろう。ムハンマド・ビン・サルマーンは既に国王並みの権力を有しており、王位継承はいつ起きても不思議ではない。むしろサウジアラビアの内政上、より重要なのはサルマーンがいつまで存命かということだろう。ムハンマド・ビン・サルマーンの権力の第一の源は父サルマーン国王の威光であり、それが消失した瞬間、サウード家内の政治が一時的に流動化する可能性も排除できないからである。

ムハンマド・ビン・サルマーンが国王に即位した暁には、誰が皇太子になるかという問題も生じる。もちろん皇太子を任命しないという選択肢もあり得るが、ムハンマド・ビン・サルマーンの身に万一の事態が及ぶ場合を考慮すれば、たとえ本命の皇太子を選ぶまでの中継ぎのような形であったとしても、何者かを皇太子に任命しておくことが求められるだろう。現行の忠誠の誓い委員会法にも「新皇太子の任命は新国王の即位後 30 日以内に行わなければならない」と記されている[15]。

次の皇太子の条件については、まずムハンマド・ビン・サルマーンとの関係が良好であることが重要なことは言うまでもない。さらに、ムハンマド・ビン・サルマーンよりも世代と年齢の双方もしくは片方が下であることが望ましいだろう。そう考えた場合、同腹の弟のハーリド・ビン・サルマーン（Khalid bin Salman）駐米大使は格好の皇太子候補となる。ただし、ハーリドはムハンマド・ビン・サルマーンと同じサルマーン家に属しているため、前述の統治基本法の第 5 条を再改正する必要がある。

それ以外では、ムハンマド家で第四世代のムハンマド・ビン・アブドゥルアジーズ（Mohammed bin Abdulaziz）ジーザーン州副知事や、トゥルキー家で第四世代のアブドゥルアジーズ・ビン・ファハド（Abdulaziz bin Fahd）ジョウフ州副知事などが、その若さや行政経験の浅さからすると異例なほどにサウジ国営通信で動静が報じられており、中央政府から一目置かれている王子であると推察される。また 2017 年 4 月に総合諜報局副長官に任命された前述のバンダルなども候補の 1 人と言えるかもしれない。

また、ムハンマド・ビン・サルマーンは 2008 年にサルマーンの異母弟のマシュフール・ビン・アブドゥルアジーズ（Mashhur bin Abdulaziz）の娘サーラ・ビント・マシュフール（Sara

bint Mashhur）と結婚し、サルマーン・ビン・ムハンマド（Salman bin Muhammed）とマシュフール・ビン・ムハンマド（Mashhur bin Muhammed）という 2 人の息子がいる。今後彼らが成人すれば、間違いなく新たな皇太子候補となるだろう。

3. ムハンマド・ビン・サルマーンの政策と国内の反応

ムハンマド・ビン・サルマーンは現在サウジアラビアが進めている外交政策や経済・社会改革の責任者であり、それらの政策の成否が彼の今後の統治の安定性に直結する。本節では、こうした彼の諸政策に対する他の王族、国民、宗教界などの反応を検討したい。

（1）外交政策と国内の反応

サウジアラビアは 2015 年 3 月から隣国イエメンの内戦に介入しているが、これが国防相であるムハンマド・ビン・サルマーンの名声にとってプラスに働くかマイナスに働くかは微妙なところである。ムハンマド・ビン・サルマーンは、国王を頂点とする政府機関全体がイエメン介入を決定したと語ったが[16]、軍隊を実際に動かす国防相であるムハンマド・ビン・サルマーンがこの介入政策の責任の大きな部分を負う立場であることは間違いない。

サウジアラビアはこの介入において、国際社会から認められている正統政府の要請に基づいて行動し、イエメンのフーシー派を通じたイランの脅威に対抗していると説明しており、それに納得している国民も多いように思える。しかし、介入から 3 年近く経過しても交戦状態が続き、年間数十億から数百億ドルと言われる軍事費が浪費されていることから、特に対外介入に消極的であった旧世代の王族などからムハンマド・ビン・サルマーンに対する批判が表出してくる可能性もあるだろう。ムハンマド・ビン・サルマーンとしては何とかして「勝利宣言」を出してイエメンから撤退したいと考えているはずだが、イエメン情勢はまだそれが許されるほどサウジアラビアに有利には進展していない。むしろ、2018 年 2 月にはイエメン南部のアデンにおいて、UAE と関係が深い南部分離主義者が、サウジアラビアの支援するイエメン正統政府の政府機関を取り囲むという事態が発生しており、サウジアラビアとしては形勢を好転させることが一層困難になっている。

2017 年 6 月のカタルに対する断交について、サウジアラビア政府はカタルがテロリストを支援していると主張し、これに同調する論説がサウジ資本のメディアでは連日のように見られた。しかし、カタルとの関係修復を期待する声も国民の中には見られた。たとえば、宗教指導者のサルマーン・オウダ（Salman al-Ouda）は、サウジアラビアとカタルの接近を歓迎するようなツイートをしたために逮捕されたとされている[17]。もちろんこれは一例にすぎないが、政府の政策に関して許される発言の範囲が狭まったと感じた国民も少なからずいただろう。

(2) 経済・社会改革と国内の反応

ムハンマド・ビン・サルマーンは改革構想「ビジョン 2030」を掲げ、2030 年に向けてサウジアラビアの経済や財政、そして社会を変革していこうとしている。彼はサウジアラビアの王族としては珍しく、テレビのインタビューに何度も出演し、国民に向けてリーダーシップや親しみやすさをアピールしてきた。この経済・社会改革は概ね国民の支持を得ているが、そうした支持は今後も持続するだろうか。

経済面では、2018 年に実施する予定の国営石油会社サウジアラムコの新規株式公開（IPO）の成否に注目が集まっている。ムハンマド・ビン・サルマーンはかねてよりサウジアラムコが上場した暁には、その企業価値が約 2 兆ドルと評価され得ると豪語しているが[18]、実際に彼の期待する水準で評価されるかは未知数であり、外国メディアなどではこの数字を疑問視する報道も見られる[19]。ムハンマド・ビン・サルマーンはこの IPO に関して自ら国民の期待値を上げてしまったことになり、評価額次第では彼の言葉に対する国民の信頼が損なわれる結果になりかねない。

「ビジョン 2030」における財政改革についても困難が予想される。サウジアラビアは「ビジョン 2030」の下にある「国家変容計画（National Transformation Program: NTP）2020」において、公的部門の給与を 2016 年の 4,800 億サウジ・リヤル（約 1,279 億ドル）から 2020 年には 4,560 億サウジ・リヤル（約 1,215 億ドル）に圧縮し、「財政均衡計画」では 2020 年までに財政均衡を達成することを目標とした[20]。しかし、こうした目標の達成に対する決意を疑ってしまうような措置も散見される。たとえば、サウジアラビアは 2016 年に公務員のベースアップの停止や超過勤務手当などの削減を決定したが、2017 年 4 月にはその決定を撤回してしまった。また、2018 年 1 月には付加価値税（VAT）の導入やガソリン料金・電気料金の上昇が実施されたが、その一方でムハンマド・ビン・サルマーンの進言を受けたサルマーンは公務員に対して毎月 1,000 サウジ・リヤル（約 267 ドル）の給付を行うと発表した[21]。このように、ムハンマド・ビン・サルマーンは国民の反発を買いかねない財政改革には極めて慎重であり、上述のような高い目標が達成されるかは不透明となっている。

サウジアラビアではツイッター上においてここ最近、反政府的なデモが呼びかけられることが幾度かあった。たとえば 2017 年 4 月には公務員手当の復活、サウジアラムコの IPO の中止、立憲君主制の樹立、宗教警察の権限回復などを求めた「4 月 21 日運動」と呼ばれるデモが呼びかけられた。また、同年 6 月には諮問評議会選挙の導入、財政の透明化、閣僚の腐敗撲滅、人権活動家の安全確保などを求めた「ラマダーン 7 日（6 月 2 日）運動」がツイッターで拡散された。同様の運動は同年 9 月にも「9 月 15 日運動」として呼びかけられた。これらの運動ではデモ参加者の集合場所や時間が指定され、サウジ当局も治安部隊を配置した。しかし、大勢の人々が集まったという形跡は見られず、インターネット上の動きとして留まった。アウワード･アウワード（Awwad al-Awwad）情報相は同年 7 月、「4

月 21 日運動」や「ラマダーン 7 日運動」はカタルが支援したツイッター・アカウントが扇動したと発表したが[22]、在外反政府サウジ人の関与を指摘する声もある。

社会改革について、サルマーンとムハンマド・ビン・サルマーンは国民から広く支持を集める政策を発表している。女性の自動車運転の解禁や映画館の解禁は、それぞれ女性や若者から広く支持を集めることに成功した。こうした動きはいずれもサウジアラビアの宗教層がかつて反対を表明したことのあった措置であった。前者については、サウジアラビアの最高宗教権威であったアブドゥルアジーズ・ビン・バーズ（Abdulaziz bin Baz）前総ムフティーが、女性が車を運転すれば悪行につながると主張し、後者については、アブドゥルアジーズ・アール・アッシェイフ（Abdulaziz bin Al al-Shaykh）総ムフティーが 2017 年 1 月には映画館とコンサートは有害で不道徳であると語っていた[23]。しかし、たとえば今回の自動車運転の解禁については、最高宗教機関である最高ウラマー会議が支持を表明している[24]。ただし、ここで留意すべき点は、総ムフティーや最高ウラマー会議のメンバーはサウジアラビア政府に雇われており、政府の方針に真っ向から反対することは難しいということである。従って、水面下でこれらの文化開放の動きに反発している宗教指導者もいるかもしれないが、現状では国民の強い支持を背景に、こうした保守的な声は埋没した状態にある。

おわりに

サルマーンは王位の兄弟間継承という半世紀以上続いた慣例を終わらせ、他でもない自らの子ムハンマド・ビン・サルマーンに王位を継承させる道を開いた。このムハンマド・ビン・サルマーンの台頭に対する他の王族の強力な挑戦は、今のところ顕在化していない。なぜなら、彼のいまの立場はサルマーンの威光、実力組織の掌握、国民の支持によって支えられているからである。しかし、サルマーンは健康状態が良好とはいえ、遠くない将来に亡くなる時がやってくる。その時に、ムハンマド・ビン・サルマーンがどれほど王族の間で人望を集めることができているかという点が、安定した体制の鍵となる。彼は既に若い世代の王子、特にファイサル家、ムハンマド家、バンダル家の王子などを積極的に登用しており、そうした人脈が彼の王族内のパワーベースとして機能するか注視する必要がある。

他方、ムハンマド・ビン・サルマーンは若さや行政経験の少なさを国民の支持で補おうとしており、その試みはこれまでのところ成功していると言えよう。女性の自動車運転解禁の動きや、エンターテインメントの振興は、数十年来のサウジアラビアの政策を転換する動きであり、それだけに国民からの反響も概ね良い意味で大きかった。その一方で、ムハンマド・ビン・サルマーンはこうした国民から大きな支持を得られるカードを、あまりにも早いペースで切ってしまっているという気がしなくもない。彼が切れるカードにも限

りがあり、今後は一過性のカードを切るというよりは、地道で着実な経済政策などの成果が求められるだろう。

また、財政についても中長期的には不安が残る。サウジアラビアは 2020 年での財政均衡を目指しているが、ムハンマド・ビン・サルマーンは補助金の削減や税金の導入といった財政改革が国民受けしないことを熟知しており、抜本的な財政改革には及び腰になっている。サウジ通貨庁の保有する準備資産が減少する中、今後国債や国際的なローンに依存する割合が増加するだろう。もちろんそれが国家運営を即座に困難にする訳ではないが、少なくとも財政改革の必要性を、国民に納得させていく必要はあるだろう。

このように、ムハンマド・ビン・サルマーン率いるサウジアラビアには課題が山積しているが、最後に指摘したいのは彼が自らの政策に対する異論の封じ込めを今後強化する可能性である。既に対カタル政策への異論が封じられた点については触れたが、政策の進展度合いによっては、他の外交政策や経済・社会改革においても異論が表出してくる可能性がある。反対意見を封殺しないためには、そもそも自らの政策に対する異論を出させないように国民が望む政策を出し続けるか、あるいは国民の声が政治に届く政治改革を検討するかの二択しかないはずであるが、ムハンマド・ビン・サルマーンの性格では前者を追及していくだろう。ムハンマド・ビン・サルマーンが今後打ち出していく政策が国民を惹きつけ続けられるかという点が、サウジ内政の安定性の観点からも注目される。

― 注 ―

1 “Saudi deputy crown prince gets 82% of allegiance council votes,” *Al Arabiya*, 30 April 2015, https://english.alarabiya.net/en/News/middle-east/2015/04/30/New-Deputy-Crown-Prince-got-28-out-of-35-at-the-Saudi-Allegiance-Council-.html, accessed on 14 January 2018.

2 “Saudi royal calls for regime change in Riyadh,” *The Guardian*, 28 September 2015, https://www.theguardian.com/world/2015/sep/28/saudi-royal-calls-regime-change-letters-leadership-king-salman, accessed on 14 January 2018.

3 “WATCH: Former Saudi Crown Prince pledges allegiance to Mohammed bin Salman,” *Al Arabiya*, 21 June 2017, https://english.alarabiya.net/en/News/gulf/2017/06/21/WATCH-Former-Saudi-Crown-Prince-pledges-allegiance-to-Mohammed-bin-Salman.html, accessed on 14 January 2018.

4 “Deposed Saudi Prince Is Said to Be Confined to Palace,” *New York Times*, 28 June 2017, https://www.nytimes.com/2017/06/28/world/middleeast/deposed-saudi-prince-mohammed-bin-nayef.html, accessed on 14 January 2018.

5 “Saudi official denies former crown prince confined to palace,” *Reuters*, 29 June 2017, https://www.reuters.com/article/us-saudi-politics-binnayef/saudi-official-denies-former-crown-prince-confined-to-palace-idUSKBN19K0OJ, accessed on 14 January 2018.

6 2017 年 11 月 7 日付 *Al Arabiya* 報道「写真：リヤードにおけるマンスール・ビン・ムグリンへの礼拝」https://www.alarabiya.net/ar/saudi-today/2017/11/07/%D8%A8%D8%A7%D9%84%D8%B5%D9%88%D8%B1-%D8%A7%D9%84%D8%B5%D9%84%D8%A7%D8%A9-%D8%B9%D9%84%D9%89-%D8%A7%D9%84%D8%A3%D9%85%D9%8A%D8%B1-%D9%85%D9%86%D8%B5%D9%88%D8%B1-%D8%A8%D9%86-%D9%85%D9%82%D8%B1%D9%86-%D8%A8%D8%A7%D9%84%D8%B1%D9%8A%

D8%A7%D8%B6.html, accessed on 14 January 2018.

7 "Mohammed bin Salman becomes Saudi Crown Prince with 31 out of 34 votes," *Al Arabiya*, 21 June 2017, https://english.alarabiya.net/en/News/gulf/2017/06/21/Mohammed-bin-Salman-becomes-Saudi-Crown-Prince-with-majority-of-vote.html, accessed on 14 January 2018.

8 "Addiction and intrigue: Inside the Saudi palace coup," *Reuters*, 19 July 2017.

9 「建国の国王の子どもたちの後には、建国の国王の子どもの一つの家系からは国王や皇太子となるものはない」という文言が加わり、第三世代の王子が国王になった後には、皇太子を同じ家系から選べなくなった。"A number of royal orders issued 2 Makkah," *Saudi Press Agency*, 21 June 2017, http://www.spa.gov.sa/viewfullstory.php?lang=en&newsid=1641926, accessed on 14 January 2018.

10 "WATCH & READ: Mohammed Bin Salman's full interview," *Al Arabiya*, 3 May 2017, https://english.alarabiya.net/en/features/2017/05/03/Read-the-full-transcript-of-Mohammed-Bin-Salman-s-interview.html, accessed on 14 January 2018.

11 "Saudi anti-corruption drive: Prince Miteb freed 'after $1bn deal'," *BBC*, 29 November 2017, http://www.bbc.com/news/world-middle-east-42161552, accessed on 29 November 2017.

12 "Rise of Saudi Prince Shatters Decades of Royal Tradition," *New York Times*, 15 October 2016, https://www.nytimes.com/2016/10/16/world/rise-of-saudi-prince-shatters-decades-of-royal-tradition.html, accessed on 14 January 2018.

13 "Saudi Crown Prince Was Behind Record Bid for a Leonardo," *New York Times*, 7 December 2017, https://www.nytimes.com/2017/12/07/world/middleeast/saudi-crown-prince-salvator-mundi.html, accessed on 14 January 2018; "World's Most Expensive Home? Another Bauble for a Saudi Prince," *New York Times*, 16 December 2017, https://www.nytimes.com/2017/12/16/world/middleeast/saudi-prince-chateau.html, accessed on 14 January 2018.

14 "Addiction and intrigue: Inside the Saudi palace coup," *Reuters*, 19 July 2017, https://www.reuters.com/article/us-saudi-palace-coup/addiction-and-intrigue-inside-the-saudi-palace-coup-idUSKBN1A41IS, accessed on 14 January 2018.

15 2006 年 10 月 20 日付サウジ国営通信（SPA）報道「政治：忠誠の誓い委員会法」http://www.spa.gov.sa/viewstory.php?newsid=397149, accessed on 14 January 2018.

16 "Transcript: Interview with Muhammad bin Salman," *The Economist*, 6 January 2016, http://www.economist.com/saudi_interview, accessed on 14 January 2018.

17 2017 年 9 月 9 日にムハンマド・ビン・サルマーンとカタルのタミーム・ビン・ハマド（Tamim bin Hamad）首長が電話会談した後に「神よ、彼らの心を一つにしたまえ」と会談を歓迎するようなツイートを発した。この電話会談後、両国は会談の報道ぶりをめぐって関係が却って悪化していた。

18 "Exclusive - Saudi Aramco IPO on track for 2018: Saudi crown prince," *Reuters*, 26 October 2017, https://uk.reuters.com/article/uk-saudi-aramco-ipo-crownprince-exclusiv/exclusive-saudi-aramco-ipo-on-track-for-2018-saudi-crown-prince-idUKKBN1CV0ZU, accessed on 14 January 2018.

19 "Lex in depth: The $2tn Saudi Aramco question," *Financial Times*, 3 April 2017, https://www.ft.com/content/7ed59bee-163b-11e7-b0c1-37e417ee6c76, accessed on 14 January 2018.

20 "Fiscal Balance Program," http://vision2030.gov.sa/sites/default/files/attachments/BB2020_EN.pdf, accessed on 14 January 2018.

21 "Saudi King Salman orders new allowances to offset rising cost of living," *Reuters*, 6 January 2018, https://www.reuters.com/article/us-saudi-decree-economy/saudi-king-orders-new-allowances-to-offset-rising-cost-of-living-idUSKBN1EU254, accessed on 14 January 2018.

22 "Qatar-backed Twitter accounts called for Saudi protests, says minister," *Al Arabiya*, 8 July 2017, https://english.alarabiya.net/en/News/gulf/2017/07/08/Qatar-backed-Twitter-accounts-called-for-Saudi-protests-says-minister.html, accessed on 14 January 2018.

23 "Saudi Arabia's religious authority says cinemas, song concerts harmful," *Reuters*, 17 January 2017, https://www.reuters.com/article/uk-saudi-entertainment/saudi-arabias-religious-authority-says-cinemas-song-concerts-harmful-idUSKBN1511LL, accessed on 14 January 2018.

24 "Senior Saudi scholars support king's decision allowing women to drive," *Gulf News*, 27 September 2017, http://gulfnews.com/news/gulf/saudi-arabia/senior-saudi-scholars-support-king-s-decision-allowing-women-to-drive-1.2096797, accessed on 14 January 2018.